

令和3年度 第3回 岐阜市総合教育会議 会議録

- 1 日 時 令和3年10月13日（水）13時30分～15時30分
- 2 場 所 岐阜市役所庁舎 6-1 大会議室
- 3 出席者 柴橋市長、水川教育長、川島委員、足立委員、武藤委員、伊藤委員、
横山委員（オンライン参加）
- 4 招聘者 京都大学総合博物館 准教授 塩瀬 隆之 氏
- 5 傍聴者 一般2名
- 6 次 第 (1) 市長あいさつ
(2) 協議「子どもの学びの構造転換」について
(3) その他
- 7 議 事

(13時30分開会)

○佐藤事務局長

只今から、令和3年度第3回岐阜市総合教育会議を開会いたします。本日、司会を務めさせていただきます、教育委員会事務局長の佐藤でございます。宜しく願いいたします。

本日は、柴橋市長、水川教育長、川島委員、足立委員、武藤委員、伊藤委員、また横山委員にはオンラインにてご出席をいただいております。皆様、本日は宜しく願いいたします。これより着座にて失礼いたします。

傍聴者の皆様に申し上げます。傍聴に際しましては、受付で配付いたしました傍聴人の遵守事項に記載した事項の遵守を宜しく願いいたします。

次に、本日の会議資料の確認をさせていただきます。皆様のお手元には、紙資料で次第及び席次表を1枚置かせていただきますとともに、資料1、2及び参考資料1、2をタブレットに収納し、準備しております。また、本日はタブレットとは別に、柴橋市長、水川教育長、各委員の皆様のお手元にノートパソコンを準備しております。不足等がございましたら、挙手願います。

それでは、次第に沿いまして会議を進めてまいります。まず、柴橋市長よりご挨拶をいただきます。

○柴橋市長

皆様、こんにちは。本日は総合教育会議にご出席を賜りありがとうございます。

まず、10月からは緊急事態宣言も解除されて、学校でも対面の授業が始まっているということで、子どもたちは長らく、タブレットを使いながらのハイブリッド方式での授業でしたし、学校現場の先生方にも色々と創意工夫やご苦労いただきながら、授業を進めていただきました。

そして、ようやく今、通常の状態に戻ってまいりました。この間の皆様のご協力、ご尽力に感謝申し上げたいと思います。

本日はそういった中で、子どもの学びの構造転換がテーマであるわけですが、私たちは昨年来、学びの主体は子どもにあるということを共通認識として持ちながら、様々な意見を交わしてまいりました。

本日の説明では、草潤中学校での実践状況や、小中一貫での学びについての成果や課題についてお話しいただくとともに、さらに、先ほどのハイブリッド方式での授業がどうであったのかといったことも含め共有いただけるということで、これらを聞く中で、これからの学びの姿として私たちはどんな姿を目指していくべきなのかを考えてまいりたいと思っています。

また、本日は塩瀬先生にもオンラインでご出席をいただいております、大変ありがたく思っております。ぜひ様々なご示唆をいただければと思います。なお、塩瀬先生には草潤中学校の開校にあたりまして、大変ご尽力いただきましたこと、改めて御礼申し上げます。色々なところで話題となり、私の耳にも多数届いております。

本市が取り組んでいる不登校の子どもたちにどう光を当てていくのかということ、これは本市にとどまらず、日本全体にとっての重要なテーマであると感じておりますので、本日もまた、皆様から様々なご意見をいただければありがたいと思います。どうぞ宜しくお願いたします。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。

それでは、次第の2、協議に移ります。本日のテーマは、「子どもの学びの構造転換」について、でございます。

本日は会議の招聘者といたしまして、京都大学総合博物館 准教授 塩瀬隆之 様に、ご多用の中、オンラインにてご参加を賜っております。塩瀬様、宜しくお願いいたします。

○京都大学総合博物館 塩瀬准教授

宜しくお願いいたします。

○佐藤事務局長

本日の協議の進行といたしましては、まず事務局よりご説明申し上げた後、続けて塩瀬様にご講演を賜り、そしてその後、意見交換へと進めてまいります。

それでは、まず事務局よりご説明申し上げます。皆様におかれましては、タブレット中の資料1をご覧ください。

○児山教育政策課主幹

事務局より、ご説明させていただきます。はじめに、資料1の2ページをご覧ください。本日はこちらにございますとおり、順にご説明させていただきます。

次の3ページ及び4ページには、第1回、第2回の協議における皆様のご意見から、子どもの学びに関わる部分を抜粋して記載してございます。

続きまして、5ページをご覧ください。これより課題認識といたしまして、松巾教育審議監より、学びの主体を真に子どもものものにしていく教育について、その後、藍川小学校・藍川北中学校の中谷校長より、小中一貫校での実践について、それぞれご説明いただきます。

○松巾教育審議監

教育審議監の松巾と申します。宜しくお願いいたします。

私からは、学びの主体を真に子どもものものにしていく教育について、6ページのスライドにありますように、3つの観点から述べていきます。

今年4月に開校した東海地区初の公立の不登校特例校である、岐阜市立草潤中学校のこれまでの半年で見えてきたことについて、まずご説明申し上げます。

ご存じのとおり、草潤中学校は、一人一人の心身の安定とともに、自分の新たなよさや可能性を発見できる、この2点を大切にしていくことで、自分らしい新たなライフプラン

を描くことができる学びの場を目指しています。そのための柱となるキーワードは、次の4つになります。

そのうちの特に4「社会との絆を感じる学び」の一例として、例えば地域の方々と一緒になってお昼ご飯を作ったり、畑で野菜を育てたりしています。また、現在、多くの地域の方々から様々な協力の申出をいただいているところでございます。なおこの活動は、もちろん強制参加ではなく、子どもたちが自分で選択して取り組みます。

次のページは草潤中学校での取組みの様子です。左の写真は教科の授業、右の写真はセルフデザインの授業で、生徒が自分で選択してギターを演奏しています。

次のページをお願いします。左の写真は、一般の学校でいう保健室ですが、ここでオンライン授業を受けている様子です。右の写真は、先ほどお話しした、社会との絆を感じる学びの場面でございます。全ての授業がライブ配信されており、この3人のように、オンラインで参加することが可能となっています。

これまでの半年間、時間割、学習場所、通知表の在り方、対面とオンラインの決定など、生徒自身に多くの選択の場面を作り、その選択を尊重してきました。それにより、生徒は自らの選択とともに生じる責任の下で行動していきます。

朝のウォームアップで今日の学習活動を選択すること、1日の学習活動を終えた後には、生徒の話をじっくりと聞くクールダウンの時間も十分に取ることで、生徒自身のゆとり、さらには生徒の実態をじっくりと掴む、教師側のゆとりにも繋がっています。

また、定期的な家庭訪問や保護者との連絡を密にしている中で、学校に行かねばならないという無言のプレッシャーを絶対に与えないという学校側の意識が、保護者、生徒の安心感にも繋がっています。

こちらには、生徒による実際の学校生活の感想を載せています。この感想こそが生徒の心の状態を表しており、成果でもあると考えています。4月から9月までの期間で、在籍生徒の約7割が、実際に学校へ登校してきています。不登校の生徒を学校に復帰させることが草潤中学校の目的ではないのですが、昨年度まで登校できなくて悩んでいた生徒が、笑顔で学校生活を送ることができている、これも1つの大きな成果と言えるかと思います。

草潤中学校でのこれまでの実践を通して、社会参画の場、弾力的な教育課程の編成、時間、場所、内容等を自ら選択し決定していく個別最適な学びの保証、十分な対話の時間の確保により、教職員や生徒にゆとりと安心感が生まれ、学びの主体が真に子どもものものとなっていく様子が、少しずつ生徒の姿から見えてきているように感じております。

次に、分散登校及びオンライン授業の実践について述べたいと思います。

緊急事態措置区域として指定された8月27日から9月30日までの期間中、分散登校及びオンライン授業のハイブリッド式運営として、右の図にありますように、登校児童生徒を約半数にし、残り半数の児童生徒は自宅でオンライン学習とする、そして次の日は交代するという形で行いました。この写真は、学校の様子と自宅で学んでいる様子です。

次ページのグラフは、ハイブリッド式の授業運営に対する児童生徒のウェブアンケート結果です。とても満足している、満足しているが65%となり、おおむね好評であったことが窺えます。

併せて、児童生徒の感想を載せております。教員が、子どもの学習活動について確認したり聞いてくれるので安心できた、繋がっている感じがするとの感想があった一方、途中で途切れてしまったり、聞き取れない場面があったということも分かりました。

夏休み明けから試行錯誤しつつ、ハイブリッド式の授業運営に取り組んだことで、学びの主体を真に子どものものとするために必要なことが見えてきたとともに、画面の向こうの子どもたちに今話していることが本当に伝わっているか、取りこぼしている子どもはいないか、対面の授業以上に配慮し、きめ細かい指導を丁寧に行うことが大事だと分かりました。授業中の「分かりましたか」という安易な問いかけが、子どもに否が応でも分かりましたと言わせるための言葉になっていないか、十分に考える必要があるのです。

学びの主体を真に子どものものとしていくため、ハイブリッド式の授業の実践を通して分かったことを、改めてもう一度お伝えします。何をどのように教えて、何をどのように考えさせるかの区別や、教員と子どもが共に学びながらお互いの気づきによりアップデートされた学びを形作っていく姿勢、子ども自身のペースが尊重されるオープンな関係性、さらに教員が一人ひとりに伝わっているか、取りこぼしがいないか、常に気を配りながら授業をしていくこと、これらが必要だということです。

草潤中学校及びハイブリッド式の授業の実践により、子どもたちに学習場所や内容等について選択の場面を与え、一人ひとりを尊重し傾聴・対話する姿勢を持つことで、一人ひとりの学習の個性化と指導の個別化に繋がります。さらに、個別の興味・関心に応じた学習内容に、地域や仲間との社会的な繋がりを位置づけることで、さらに個の学びが協働的な学びへと広がり、ひいては探究的な学びへと深めていくことができます。このような学びを継続していくことが、誰一人取り残すことなく、全ての子どもたちが自らの才能を開花させ、幸せな未来をつくり出すための力を身につけていく教育であり、学びの主体を真

に子どものものにしていく仕組みとなるのではないかと感じております。

一方で、自宅で学習しても学校と同じように学ぶことができるのであれば、このコロナ禍が収まるまで登校しないと言う子どもも数名います。オンラインでの授業に学習の手応えを感じているのだと思います。そしてそれは、学校でなくても学べるということです。

このことは、どこにいても学べること、学校でしか学べないこと、自分でできること、教員や仲間がいないとできないこと、その区別と価値が問われているのだと思います。さらに言うならば、学校はなぜあるのか、そう問いを投げかけられているのではないのでしょうか。そして、この答えを求め続けることこそが、学びの主体を真に子どものものにしていくことに連なっていくのではないかと考えます。以上となります。

○藍川小学校・藍川北中学校 中谷校長

宜しく願いいたします。校長の中谷でございます。

本校は小中一貫校となり、2年目となりました。昨年度末の学校運営協議会において、両校を総称し、藍川北学園という一貫校の名称を決めていただきました。

こちらは、小中学校の児童生徒数の推移です。ご覧のとおり、年々減少しており、小中学校とも、現在は小規模校となっております。また、本校のこれまでの歩みをこちらで紹介しております。

この藍川地域は、自治会連合会長さんのもと団結力があり、本当に温かな方々に学校を守っていただいております。地域の方々の情熱に支えられながら、藍川小学校は来年度、自治会とともに記念すべき大きな節目となる、50周年を迎えます。

次、お願いします。このように、小・中で学びと暮らしとの繋がり、系統性を持ったカリキュラム作成を進めております。

ここからは、小中一貫校としての取組やその成果につきまして、お話しさせていただきます。挙げられることとしまして、1点目は、中学校教員による小学校における教科担任制の実施、2点目は、小学校教員による中学校における免許外教科担任指導の解消です。また3点目として、異学年交流があります。1小1中の小さな学校だからこそ、様々な形で積極的に取り入れております。そして4点目は、中1ギャップの解消として、昨年度より中学校の校舎の中に、6年生の教室を設置する取組を進めています。

では、実際に子どもたちはこの小中一貫校をどう感じているのか、アンケートを取ってみました。まず、6年生の60%の児童が、学習面についてよさを感じていました。教科

担任の授業が楽しい、分かりやすいなど、嬉しい反応をしてくれています。

一方、課題としては、半数以上の児童がもっと交流をしたい、もっと仲を深めたいといったことから、交流機会の少なさを課題と捉えています。

続いて、中学校3年生のアンケート結果ですが、同じく一貫校のよさとして、100%の生徒が、小・中で一緒に活動できることの楽しさや広がりを楽しんでいました。

反面、課題としては、やはり6年生と同じように半数以上の生徒が、関わりの少なさを挙げています。また、40%近い生徒が、小・中を行き来する職員のことを気遣ってくれています。その他1名ですが、子どもたち同士がよく知っているからこそその苦しみ（人数が少ないことで、関係性が変わらないこと）を書いてくれました。このことは、私たち職員も1小1中、小規模校の課題として捉え、大切にしていきたいと思います。

最高学年として、中学校3年生の子どもたちは、本当によく頑張ってくれており、様々な活動の中にその姿がしっかりと表れています。

そんな3年生の子どもたちには、今後の学校のことについても聞いてみました。やはり毎日小学生に会えるということで、約20%の生徒が、小・中の施設を一つにしたいという、一体化を挙げていました。

本校は、地域の大切な学校としてこれからも、もっともっと地域に愛され、また地域を巻き込み、地域と連動する小中一貫校でありたいと願っております。そのためにも、学校として、地域に貢献できる学校、児童生徒であることを目指し、進めてきております。

その一環として、ここでは、コロナ禍における学校の貢献活動の一部を紹介しております。また、これに対して、地域の方々からもありがたいお返しをいただくなど、相互の温かな交流が続いております。地域と共にある学校として、そしてまさに、藍川大家族の一員として、これからも歩んでいきたいと思っております。

最後に、そんな学校を目指していく中で私たちが願うことは、児童生徒数の減少により対応可能となりつつある、施設一体型小中一貫校への移行です。そしてさらに、未来を見据えた展望として、1つの大きな職員集団の力を生かした独自のカリキュラム編成を行い、この藍川の地に、藍川の子どもたちに合った新たな学校の形、義務教育学校へと希望の光を求めていきたいと願っております。ありがとうございました。

○児山教育政策課主幹

それでは引き続き、スライド48ページをご覧ください。今お話しいただいた実践を受

けて、今後、本市が目指す探究的な学びのあり方として、学びの主体を真に子どものものにしていくこと、また9年間の一貫した学びを実現することを挙げるとともに、その実現に向けた課題をお示ししております。

次ページ以降は、これらの課題に対する施策検討の視点として、お示しさせていただいております。あくまで例として、これらに囚われることなく、皆様からは忌憚のないご意見をお願いできればと考えております。

最後に、後ほどの意見交換では「1、本市の学校が見据える子どもが主体の学びについて」「2、本市の学校がこれから目指していくべき9年間一貫した学びについて」、この2点をご協議いただきたいと考えております。事務局説明は以上です。

○佐藤事務局長

続きまして、これより塩瀬様からご講演を賜りたいと思います。皆様におかれましては、タブレット中の資料2をご覧ください。それでは、塩瀬様、宜しくお願いいたします。

○京都大学総合博物館 塩瀬准教授

本日はこのような機会をいただきまして、ありがとうございます。

改めまして、京都大学総合博物館で准教授をしております、塩瀬と申します。本日は、子どもの学びの構造転換というテーマのもと、話題提供の機会をいただきましたので、私の知り得る範囲内でご紹介できたらと思っております。

本日はせっかくオンラインで講演させていただくということですので、slidoというアプリを使い、皆様のご意見をタブレット、スマホなどでお受けしながら進めてまいりたいと思っております。委員の皆様には、お手元に端末が用意されているとうかがっております。また、他の会議参加者の方々も、もし宜しければご参加いただくことも可能です。画面のQRコードを撮影し、ご参加いただければと思います。

コロナ禍に入ってから、私自身が中学校や高校で講演するときには、毎回これを使っております。生徒にもこれで書き込んでいただき、双方向に進めるということをやっていますので、ぜひ皆様にもご体験いただけたらと思っております。

早速ですが、もし宜しければ皆様、実際に書き込んでみてもらえますでしょうか。市長や教育長もぜひ。ただ聞くよりは自分で動かしていただくのが一番良いかなと思っておりますので、ぜひお試しください。

このコロナ禍で、特にレクチャーなどをオンラインでやりますと、割と一方通行になりがちなので、このように参加者の声を拾いながら進めております。先日も、ある学校で400名ぐらいの生徒にこのslidoをやってもらい、それぞれ質問を5つぐらい書いていただくと2,000もの数になります。それに答えながら進めていくというようにしております。先ほどから皆様書いてくださっており、ありがとうございます。時々、わたくしの方から問いかけをしましたら、ぜひ回答をお願いいたします。

本日お招きいただいたきっかけにもなっているかと思うのですが、草潤中学校の開校にあたり、開校式でスピーチする機会を早川前教育長よりいただきました。その場で思いついたことをお話しただけなのですが、大きく取り上げていただきまして、ネット上でもバズりました。資料の方、分かりますでしょうか。羽生結弦さんやオードリー・タンさんよりも視聴数が上になっていますので、相当に岐阜市が注目された瞬間ではないだろうかと思っております。

このスピーチに関してなんですが、この縁でメディアにも多数取り上げていただきまして、早川前教育長と一緒に話しさせていただいたり、井上校長と一緒にテレビに出演させていただいたり、この草潤中学校のコンセプトをご紹介させていただく機会がたくさんありました。それだけ、岐阜市が先進的な学校を創られたということに関して、日本全国から大きな注目を集めているわけであり、5年先行く岐阜市の教育として、さらにリードしていただくためのお手伝いができたらと思っております。

先ほどのネットの記事やテレビの放送などで、もしどれかを読まれたり、あるいは見られたという方がいらっしゃいましたら、短くて結構ですので、宜しければ感想やコメントをslidoでいただけたらと思います。「新聞を拝見しました」、「ネットで拝見しました」、などのコメントをありがとうございます。「バズっていることを早川前教育長に私がお知らせしました」、「テレビ番組を拝見しました」、こちらもありがとうございます。

このように、とても注目していただきました。この注目いただいたことに関してですが、まさにどのようにバズったのか。バズるといえるのは、ネットワーク上で一気に皆さんの注目が集中したというような状態を表します。次に示す画面がヤフーのニュースの中、あるいはツイッターで特集された記事ですが、ちょうど3月30日から4月1日までの間で、ツイート、リツイートが1,500件ぐらいされて、その注目度からヤフーのニュースへも取り上げられました。このツイートにおけるコメントには、色々な感想が載っており、こちらにその感想を少し分類したものがございます。つまり、どこに注目しながらこの記

事がツイートされていたかということなんですけれども、例えば、〈義務教育の改めでの意味〉、〈本当に一人ひとりを取り残さない〉、〈取りこぼさないという意味において、学習権〉というものに注目してリツイートされている方がたくさんいらっしゃいました。また、〈この学校が公立でできたということがすごい〉と。私立学校であればこういった学校を創るということも、理事長や創始者の思い一つでできるのかもしれませんが、「これを公立で成し遂げたことがすごい」、というご意見が多くありました。

他にも、「バーバパパのがっこう」を理想の学校と掲げていたこともあり、「バーバパパのがっこうができた」、とリツイートくださった方もいらっしゃいました。さらに、「岐阜すばらしい」と書いてあり、関係者の皆様の尽力を称える声もあったかと思えます。そして、「これが本当の当たり前になるといいな」という声もありました。このように、ネット上での声やデータを分析し、読み解くと、先進性だけが注目されたわけではなく、色々な観点で注目されているということが分かります。

本日お話しさせていただく話題に関しましては、まずは教員や地域の大人のあるべき姿、それから、子どもとの関わり方についてまずお話しさせていただき、後半では学校に求められる役割について、ご紹介できたらと考えております。

まず、私は小学校から高校まで、全ての学校種に講演に行く機会がありますが、この1、2年、小中学生の子どもたちと話をするとき、いつも最初に話題にする内容があります。

『将来何になりたいか』ということを見聞たちがよく聞かれます。世間のニュースあるいはテレビでは、子どもたちが「ユーチューバー」と答えると、〈嘆かわしい〉、〈そんな博打のような〉と言われます。また、「公務員がいい」と答えれば、〈安定志向で夢がない〉と言われます。「サッカー選手」と答えると、〈夢ばかり見ずに現実を見ろ〉と言われます。そして「会社員」と答えれば、〈コロナ禍の影響でそういう意見になっているんだな〉と勝手に分析されてしまう。

要は、何と答えても何かは言われているわけです。実際、色々な会社が調査しており、調査会社ごとにランキングも違うのです。でもそれは当然であって、聞いている相手が違うし、聞き方も違うからです。昨年、その中でも皆様がよくご存じのランキング調査では、急に会社員が増えた云々ということが話題になりましたが、実は昨年はコロナ禍で今までやっていた対面訪問ができなくなったため、インターネット調査という聞き方自体がガラッと変わっているんですね。

このように、聞く人数や聞き方も変わっているにもかかわらず、1位が変わったという

ところだけが取り沙汰されている。そもそもデータを集めた相手、どれだけの量をどんな方法でということを考えず、結果だけで盛り上がってしまっているところにとっても危うさがあり、それを本当に子どもたちに押しつけてよいのか、そう思います。ゲームクリエイターもしかり、サッカー選手もしかり、ユーチューバーも会社員も、結局、何を褒めたいのか、ということが大人にも見えていないように思います。

ここでまた、slidoを使いたいと思います。皆さんが思うに、『大人は子どもに将来何になると言ってほしいのでしょうか』。あるいは、『皆さんだったら何を褒めたいと思っていますか』。現状で結構ですので、どのようにお考えか、おっしゃっていただけたらと思います。コメントありがとうございます。「幸せになってくれれば何でもいい」、「世のため人のために働ける大人になってほしい」、「子どもが自ら考えた答え」、など記載いただいています。子どもが自ら考えた答えだけでも、「ユーチューバー」と言われると、本当にやっていけるのかと心配してしまったり、公務員と言うと、なんだか守りに入っているようで挑戦をしないように見えるのが心配だし、そんなことでいいのかなどと言ってしまうりするのですね。

他にも、「今は決められない」、それも確かにそうです。「子どもが自ら考えた答え」、「クリエイティブな職業」、「自分が思い切り楽しめる仕事」など、コメントいただきました。

今、皆様から色々なコメントをいただきました。きっと大人が期待していること自体は、子どもが笑顔で楽しく働き続けてくれれば、あるいは学び続けてくれれば良いと考えつつも、それが特定の職業で表されたときに様々な思いが返ってきますし、それは時代ごとに変ってくるので、いまいち大人たちも何と答えてほしいのか、分からないまま、あの質問を子どもたちに投げかけているのではないのでしょうか。

そういう意味で、子どもも夢を自分でどう説明していいのか、実は分からない。大人がどんな仕事をしていて、またそれを楽しんでやっているのか、大人自身が自分で考えて、周りの人たちも含めて皆を幸せにする仕事に就いているのか。こんなときだからこそ、本来はこれらの姿を大人が子どもに示し、その手本になるはずだと思うのですが、このコロナ禍によって、割とどの大人も目線を下に落とし、肩を落としてしまっています。その中で、子どもたちがどの背中を見て大人になるべきかということは、結構悩ましかったのではないかなと思います。

昨年と今年、学校でお話をする機会では、このような思いを持って臨んでおりました。

今、人工知能やロボットに仕事が奪われるのではと戦々恐々とするような時代の中で、実際にはどんな仕事がロボットに奪われるかだけを、人々は気にしている。そもそも電車の切符を切るという仕事も、元々は駅員さんや車掌さんがされていたものが、自動改札に置き代わりました。実際、切符を上には繰り返す機械機構はかなり複雑な作りなのですが、これがICカードになり、タッチするだけで通れるようになったことで、この機械機構を作ったり、修理する必要がなくなり、実はメンテナンスの仕事が奪われたとも言われています。

さらに、韓国のKTXという高速鉄道では、実は改札そのものがありません。インターネットで予約すれば、そのままプラットホームから新幹線に乗れるようになっており、改札機すら置かれていません。その代わり、無賃乗車が何割か生じているという問題があるそうですが、実はそれを許容しても、改札を設置するより低コストらしく、その方が社会として経済的であるということが分かっているそうです。

あとは、その不公平な部分をどう罰するかということであって、そういう意味で言えば、実は機械やロボットが人間の仕事を奪っているわけではなくて、それを採用するかしないかを決める、結局は人が決めているのです。つまり、社会の側が、この仕事を人間にやってもらいたいと思っているかどうかというところが大事なのです。

自分たちが使おうとしているものが何なのか、逆にそれを人に戻せば世の中が幸せになるかという、実は他の人たちはそれを望んでいないかもしれない。つまり、雇用を確保するために、全部機械化することをやめて人間の手で行うようにすれば、皆がハッピーになれるかという、自分の会社や仕事に行く道すがら、全ての自動改札が止められ、改札する人に代わると困る人もいます。

そう考えたとき、個々の考え、意見でその仕事なくなる、なくならないということに対して賛否が分かれることとなる。行く先は不透明であるし、恣意的でもあるわけです。だからこそ大事なことは、視点を変えて、今求められている力、今求められている仕事は何なのかを常に考え、探す必要があるということなのです。

これはOECDが出している統計データで、25歳以上になってから大学あるいは専門学校等、高等教育機関で学んでいる大人の国別人数比較を示したものです。OECD加盟国の平均が20%を超える中、日本はたった2%以下、とても低い値となっています。

それはなぜかという、日本では最終学歴と呼ばれるように、中学高校の卒業あるいは大学卒業の時点で基本的に学習は終わったことになってしまい、それ以降、学ぶ機会を持つ

ていないという実態があります。つまり、社会人になってから、それまでに向かっている方向が行き詰まったときに、方向転換をする手段を持ち得ていない、これが日本の一つの閉塞感から脱しにくい難しい観点であると思います。そう考えたとき、これからの時代、本当に求められる力は何なのかというと、小学校、中学校、高校、大学、そこで勉強が終わりではなく、常に学び続ける、学びを生涯に亘って楽しみ継続できるような、学びの新しい方法、スキルそのものを身につけておくことが求められるのです。

これは同じく、人材派遣会社が出した国際比較資料ですが、日本は決して自己研鑽をしないわけではないのです。研修なども真面目に受けますし、学習もするのですが、その多くは、勤務先が与えたものに取り組むだけです。つまり、教員研修ならば、教育委員会が用意した研修を受講するだけなのです。決して学んでいないわけではないのですが、それでは、教育委員会が知っていることしか届けられないという問題があります。

これは企業でも同じで、会社が用意する研修は、その企業が見通している範囲内での研修でしかなく、それ以外のことを学ぶ機会はないわけです。もしその方向性が誤っている、あるいはその方向性が閉じている場合、本当に必要な学びを得ることはできないでしょう。

この点、例えばオランダでは、教員研修は国や地方公共団体が用意するものではなく、1人あたり13万円程度の研修費が与えられるだけなので、自分が必要とする学びとして、何を受けてもよいとする制度が確立しています。つまり、先生自身が研修内容を主体的に選択できるようになっている。そういう意味で言うと、何を学ぶかということ自身で決められる。そのような姿が体现されていればこそ、それを見て育つ子どもたちも、学ぶ内容を自分で決められるようになるのではないかと思います。だから私は、『大人こそが主体的に選んでいますか』と問いたい。そうでなければ、選択できる子どもたちは育ってこないと思います。

子どもにやってほしいこととして、今も色々なものが出てきていますが、まずは大人がやってみせるべきなのではないかと思います。大人がやったうえで、それを背中として見せるべきです。例えば、Society 5.0、SDGs、グローバル、プログラミングなど、子どもと学校に何でもかんでもしわ寄せが来てしまっていますが、実際にそれができる大人は、街の中に本当にどれぐらいいるのでしょうか。

ここでまた、slidoを使ってみましょう。今度は先ほどと違って、アンケート形式にしてみます。正直な話、この中でご自身がやったこともなければ、実はよく分かっていないことを挙げてください。アンケートは匿名ですので、率直に投票してみてください。

ありがとうございます。この結果から、Society 5.0社会という語彙について、68%の方がよくわからないと回答くださいました。確かに、これもまさによく分からない言葉の一つですね。昨年度、一昨年度と、岐阜県教育委員会の講演に呼んでいただいたときのタイトルが、「Society 5.0人材をいかに育成するか」でした。講演の冒頭、私は参加されていた先生方に対し、『この中でSociety 5.0人材の方は手を挙げてください』とお声がけしましたが、誰も手が挙がりませんでした。

そうであるなら、自分が違う、あるいは見たこともない人を育てるというのはどういうことでしょうか。まずは、そこを考えていただくところからスタートしなければなりません。だから、よく分からないにもかかわらず、「こういうことが大事だと言われたから」、「子どもたちにはこんな学びが必要だと言われたから」、本当にそんな理由だけで子どもたちに向き合っていてよいのでしょうか。

繰り返しになりますが、学びのオンライン化を求めるなら、オンラインでの学び方というものをまずは大人がやってみるということが大事であって、だから、本日のこの会議自体もこうやってオンラインで繋がり、slidoも使いながら双方向にして進めさせていただいているわけです。

次に、ここからは、これからの学校に望まれる役割について、私見を述べさせていただけたらと思っております。本日の後半の話の結論としては、草潤中学校でスタートした岐阜市のこのチャレンジというのは、とてもすばらしい先進的な取組みだと思いますので、ぜひそのノウハウを、部分的にでもどんどん他の学校へ導入していくことができればよいのではないかとということです。

また、ぜひ教員研修もデジタル化、オンライン化を一層加速させていくとよいのではないかとということ、また採用の時点でも、できればこういったデジタルを駆使する能力に長けた人材を積極的に採用すること、極端な話をすれば、採用試験を丸々オンラインでやるなど、今後一緒にこのような学校を創っていけるような先生方、そういった新しい人材についても一緒に考えていただく必要があるのではないかと思っております。

これは、3月27日の内覧会の様子です。除幕式にお邪魔させていただきました。皆様もご承知のとおり、草潤中学校は教室だけでなく、図書室、音楽室などどこで学んでもいいとされています。もちろん家からでも構わない。出席の概念というものを少しグラデーションにしているということが、一つ大事なポイントかと思えます。

それから、職員室で雑談したり、お弁当を食べたりすることもできる。どこで食べても

良いことになっているので、先日、私が学校にお邪魔した際、校長先生と一緒に学校視察を終えて部屋にもどってきたとき、既に校長室でお弁当を食べている子たちがいまして、私はそれが素晴らしいなと思っています。断りもなく先に食べていられるような場所に校長室がなっているということ、これが一番素敵なことだと思っています。

あと、WEST相談室の案内板に描かれたハイヒールの絵、これはハイヒールを履いてもいいから来てほしいという校長先生の思いを受けたもので、実際にハイヒールのまま来られた生徒もいたようです。その生徒は2日、3日で足が痛いからとスニーカーに変えたそうですが、履きたいものを自分で決めて実際に履いてみて、そして自分で変えたこと、それが素晴らしいですね。このように、生徒が選べるのがこの学校にはたくさんあるのです。

これは最初、早川前教育長から、「塩瀬先生にとっての理想の学校とはどんな学校ですか」、「どんな学校にしたいですか」と聞かれ、そのとき即答したのが、『バーバパパの学校』でした。それは『自分が自分のまま居られる場所、自分で選べる場所、そういう学校が理想』だと思ったからです。

学校形態としては、草潤中学校も不登校特例校ですが、不登校になったから仕方なく通うような学校ではなく、「不登校になってでもあの学校に行きたい」と思われる、そんな理想の学校を創りたい、早川前教育長はそうおっしゃっていました。そのとき、私自身これまで色々な学校を見てきた中で、きっとこの草潤中学校を創る参考になると思い、ご紹介した3つの学校があります。京都市立洛風中学校、京都府立菱創高校、それから埼玉県宮代町立笠原小学校、この3校です。

まず、同じ不登校特例校である洛風中学校ですが、ここは国指定の学校としてスタートしたところで、校門を造らないというところからスタートし、地域の中に馴染む学校の姿を目指していました。それはなぜか、不登校の原因として学校の中での苦しさというものがある中で、校門を見るだけで既に心が苦しかったり、動悸が早まるという生徒がいらっしやるそうで、それに対応するため、校門を無くし、まちに溶け込むような学校の外観を目指したそうです。

また、教室に直接行くのではなく、立ち寄れる場所がたくさんあって、そこで先生と話すことができたり、廊下の奥の方の少し暗がりに机と椅子が置かれており、自分でリラックスして勉強したいときに籠もることができたりします。学校の中に幾つかの学べる場所が用意されていて、生徒が自分でその場所を選べるというわけです。

次に菱創高校ですが、こちらは単位制の学校で、必要単位の大半を1年生に集中して学び、2年生、3年生は割と自分好みに授業時間割を選ぶことができます。自分の将来とリンクさせて、授業時間割を変更できるわけです。先生側、学校側からすれば必要最低単位があり、学んでもらわないといけないものがあるわけです。しかし、その学ぶ順序、つまり幕の内弁当で食べる順番が決まっているのがこれまでの時間割だとするならば、これを自分好みに変えたい、食べる順番を自分に合うものにしたいという思いが生徒一人ひとりにはあるわけで、それを許すのがこの学校の時間割の自由選択という仕組みです。

その代わり、時間割を組み立てるのはとても難しく大変なので、この学校でその学年の時間割がちゃんと決まるのは、なんと10月ぐらいになることもあるそうです。4月から先生たちと相談を始め、勉強しながら、だんだんこうしていきたいという対話を重ねていく。廊下にもたくさんの談話スペースがあり、いつも先生と生徒が至るところで話をしている。私はどんなふうになりたいか、それを先生と話す機会を幾度となく持つ中で描いていき、それに応じて、一人ひとりが違う時間割を辿ることとなります。

そんな様子のため、たとえば親御さんからの連絡事項などを生徒に伝えようにもその生徒がどこにいるかが分からないということが、悩みとしてあったそうです。これに対しては、<今ここにいます>ということ、生徒自身に表明してもらった仕組みを取っています。草潤中学校でも同じく、“イマここボード”というものが作られていますね。きっと生徒だけでなく、草潤中学校の先生たちがすごく頑張って調整されたことだと思います。ここで不登校特例校としては、頑張って先生が声をかけようとしたことについて、逆に声をかけてほしくない生徒もいたそうです。これはたしかに難しいさじ加減のいることで、同じ見守る行動であっても、直接に声をかけて見守ることがよいこともあれば、そっと見守ることが必要なときもある。そういった両方の生徒のリクエストに応えられるようにしているわけです。

さらに今は、声をかけてほしくないとき用のサインというものもできていまして、そういった工夫が新たにできるというのはすごく大事なことではないかと感じています。つまり、見過ごせないというのは先生側の立場であって、それは確かに優しさではあるのだけれど、むしろそっとしておいてほしいと思う生徒の気持ちもあるということを知る、それがすごく大事なことだと思います。見守るということ、見放すわけではなく声をかけないということ、この微妙なさじ加減をきっと今、草潤中学校の先生方は、試行錯誤しながら獲得されているのだと思います。

そしてもう1校の笠原小学校、これは町立の学校で、象設計集団さんが設計されたデザインそのものも素敵な学校ですが、裸足学級を実践されていたり、教室とその外がシームレスに繋がる造りとなっていたりします。下駄箱で靴を履き替えなくても出入りできるということで、学びと遊びの切れ目がなくなる。そして、生活の中のことがすぐ学びに変わり、学びがすぐ遊びに変わるように、全てが繋がっていくという視点を大切にしている。

どうしても私たちは、ここからは勉強、ここからは遊び、ここからは日常というように全てを切り離しがちなのでしょうか。なぜなら、その方が効率がよいと考えているからなのですが、本来は日常の中にも学びがあるし、学校の中にも遊びや暮らしがあるはずなので、そこを本当に繋ぐ気があるのならば、その境目はどんどん無くしていく方が良いでしょう。

さらに面白いなと思ったのは、地域の人たちと繋がっている学校なので、例えば稲刈りをしたり、その藁から肥料をつくるなど色々な活動が行われていますが、その中に、手漉き和紙で自ら漉いた和紙を卒業証書にするという取り組みがあります。これがとても素敵だなと思っています。

自分たちの身近に何が植生していて、どんな暮らしがあつてという繋がりを、地域の人たちとの対話を通じて知り、自分たちがこの地域の中で育ち卒業していくという過程を地域の人たちと一緒に共有していく。子どもたちは、指導を受けながら手漉き和紙を作り、その和紙に地元の印刷業者が印字を施し、卒業証書となる。これは、本当にすごいことだと思うのです。皆様は、小学校、中学校の卒業証書を今もお持ちですか。捨ててはいないと思うけど、どこにあるだろう。きっと誰もがそんな感じだと思うのですが、自分で漉いた物なら、どこかに飾ったり、思い出も出るのではないのでしょうか。自分の学びの結果を大事にするという意味においても、当事者意識を持ち、卒業証書を掴むということがとても大事なことだと、私はそう思い魅かれたわけです。

こういった学校を紹介していく傍ら、その結果何が大事かという、それはやはり<選択する>ということです。『学びたいときに、学びたいところで、学びたいことを学べる』。これこそがまさに主体的に選択するということです。これが実は理想の学校なのではないかと考えたとき、選択させるだけなら簡単だけれども、実際に何が選択できるのが肝心だと思いました。

学校の中での時間、場所、内容、これらにどれだけ選択権を持たせられるか、そこにチャレンジしませんか、この草潤中学校を構想する前の段階で、早川前教育長や教育委員会

の方々にそうお話をさせていただきました。

正直、これを実現するのは並大抵のことではなかったと思うのです。しかし、文部科学省との交渉を重ね、理想と現実の開きを少しずつ乗り越えながら、最大限創り上げてくださったその形が、今の草潤中学校だと思います。一般的な不登校特例校で期待されているものとは桁違いに、理想をいろいろ詰め込んだ充実した学校となっていると私も思っています。

これはまた、slidoで皆様のご意見をお伺いできたと思うのですが、草潤中学校で実践されている〈主体的選択〉のように、色々な項目をここに挙げています。この中から、こんなことが他の学校でも実現できたら良いなと思うものを、アンケートでお答えください。〈学ぶ場所が選択できる〉のはいいねとか、融通を利かせて時間割を変更できるのもいいねとか、複数選択いただくことも可能です。制服や制靴がなく、格好が自由だといったのも選択の一つですね。

担任の選択制ということに関しましても、これは特に以前の学校の時点で、人間関係のもつれや相性の問題に苦しんだ生徒たちがいたときに、担任の先生を選べるようにするのが大事ではないかということから、担任選択制を採っていただいております。ただし、幾つかの講演会でお話をしていると、この取組みについての学校の先生方の評価は、結構賛否両論に分かれていました。それから、職員室に自由に出入りできるということについても、少し困るといった意見を持つ先生が多かったように思います。これは、職員室を普段から先生と話せる、悩みも相談できる、もっと出入りできる場所にしようというコンセプトです。

投票、ありがとうございます。今、18人の方が回答くださいましたけれども、こういった皆様が良いと思っている、評価している部分について、ぜひ他の学校へ水平展開できるとよいのではないかと思います。〈学ぶ場所の選択〉に関しても、教室だけでなくとするのは、例えば、皆様も仕事をするときにはオフィスだけではなく、たまにはカフェで仕事をしてみたいとか、たまには公園で、川沿いで仕事したいなと思うことはありますよね。子どもたちもきっと同じ感覚でしょうし、学校がそうあってほしいと思うのではないのでしょうか。

あと、私は、弁当を食べる場所が選択できるということが、結構重要だなと思っています。例えば、週5で通っている生徒もいれば、週2で通っている生徒もいるような場面、この生徒同士が一緒にいるときは、お弁当も一緒に食べられるのですが、残り3日は一緒

に食べる相手がいないという状況になることもあります。

このとき、実際に音楽室や図書室など、別のところで食べられるということは、一人でいることが目立たずに一人になれるというのは極めて重要な観点だと感じています。学校の中で常にテンションやモチベーションを高く維持することは難しいですし、みんなと一緒にいたいときもあれば、一人になりたいときもあるはずです。

もともと人間は、他人の目を気にしてしまうものですし、日本人はその傾向が顕著な気もします。中学生ならば、なおさら他人の目を敏感に感じるのではないのでしょうか。そういう意味で、もちろん学校の管理上、見えない場所があるのは不安なことかもしれませんが、見えないではなく、他の人の目が気にならない場所をつくるという、草潤中学校が今やれていることはその観点でもすごく面白い、価値のあることだと思っております。

今お話ししたような、学びたいときに、学びたいところで、学びたいことを学べる学校のデザインを考えようと思立ち、デザイナーや教育行政の方、またこのワークショップを開催した京都の地元の高校生たち、皆で一緒に考えました。このとき最初に出てきた言葉が、「不登校特例校という言葉をやめないか」、という発言でした。「不登校というのは、学校に行けない子ではなく、学校に行かないという選択をした子どもたちの行動だと思えばよい」のではないか、そういう意味で、「不登校という言葉はやめよう」というのが最初に参加者の意見として出てきたのです。

この点、制度上の公称であり、勝手に変えるわけにもいかない部分でもありましたが、この発言はとても本質を突いた視点で、これから創る学校は、不登校特例校という枠組みではあるけれど、不登校の子どもたちのための学校ではなく、理想的な学び舎を創るのだ、その思いを共有して検討を始めることができました。究極的には、こういった学校がこれからの標準になる。自分たちにとって学べる時間、学べる場所、学べる内容を選ぶことができる、学習者の主体的選択として、これが一番重要な本丸ではないかと思いついたわけです。

今まで大人は良かれと思い、子どもたちに定型的な学び方を与えてきました。そうしないと、子どもたちは学べないと考えていたからです。しかしそうではなく、私たちは子どもたちを信じて委ねていかなければならないと思うし、もちろん信じるに足るだけの学べる力を、寄り添い、養っていかなければいけないと思います。そうやって、選択そのものができる人材を育ていかなければならない。ここがこの草潤中学校によってスタートした、新しい学びの転換点なのではないかと思っております。

あるエピソードがあります。これは兵庫県の芦屋国際中等教育学校の方から聞いたのですが、この学校は1学年80人のうち、外国籍の方が30人、帰国子女の方が30人、日本人の方が20人というような学年だったときがあるそうです。普段から国籍も全く関係なく、多文化が混ざり合うような状況だそうですが、すごく面白いのが、中間テスト、期末テストの後は毎回、生徒が先生の前に列になって並ぶそうです。

それはなぜか。これが、数学や理科の場合は答えが一つに定まりますが、例えば国語の問題で、「著者がどう思っていたか」のような日本語的に解釈すると定まった答えがないようなものについて、外国籍や帰国子女の生徒たちは皆、先生の採点に納得がいかず、自らの主張のため列に並ぶのです。これは、普通の学校にはなかなかない光景ですよ。なぜなら、普通の生徒であれば、実は本当はそう思っていなくても、先生が「これが正解です」と言えば疑いもなく自ずと従う。それが当たり前となっている中で、これだけ自分を主張できる生徒が居るのは、素晴らしいことではないかと思います。

主体的に選択することを掲げる中で、腑に落ちないことを単純に承服してしまう姿勢、これは本当に正しい学びの姿なのだろうか、私は考えるのです。そういう意味で、職員室に何をしに行くのだろうかを考えたとき、自分が思ったこと、考えたことを話せる場所として職員室があればいいのではないかと、これも草潤中学校を創るとき、準備室の皆さんと話をしていたことのひとつです。

通信簿についても同じことが言えると思います。それを受けて出てきた提案の1つが、“わがまま通信簿”というものです。先生が見る点はもともと決まっていますが、実は先生や大人にこんなところを見てもらいたい、そう生徒が思うところもあるはず。つまり、自分がこんなところを見てほしいと思っていることを素直に先生に話せる場所、それが職員室であるべきではないかと思います。名前はわがまま通信簿ですが、実はちゃんとコミュニケーションを取りながら、自分の評価というものを考えてみてはどうか、そう促したくて、今回、草潤中学校でも40人それぞれの通信簿を作ろうという話とも関係が繋がればと思っています。

これは決して<甘い評価をする>という意味には受け取ってもらいたくないのです。今までの通信簿って、誰とも通信してないように児童生徒には見えるんですね。子どもたちはその議論からは、どこか置き去りで、学期末にもらい、次の学期の初めにまた返すだけのものでしかない。勿論、先生はコメントを書いています。逆に生徒がたくさんコメントを書く欄のある通信簿はあまり記憶にありません。たどると、ちゃんとし

た通信はそもそもできていなかったかも知れません。それが本当に生徒に届いているのかということも含めて、こういった実は今までの学校でできていなかったことが実現できる、草潤中学校がそんな学校であってほしいという思いがありました。

私自身は、目の見えない人、車椅子の人、障がいのある人たちと共に社会参画する、インクルーシブデザインの考え方のもと色々なプロジェクトをやっていますが、今までの組織の多くは、正方形のタイルを綺麗に並べた、そんな集団でした。そして、そのタイルが欠ければ、またそこに同じ大きさ、同じ形のタイルを並べるというマネジメントです。

しかし、今、ダイバーシティ・アンド・インクルージョンの考え方が浸透しつつある中で、外国人、女性、障がいのある人など、あらゆる人々を取り込もうとしています。多くの場合、失敗している。それはなぜか、また正方形にしようとしているんですね。多様な人たちに入ってもらおうと言いつつ、同じ形だったら、同じ方法で考えてくれるなら入れてあげる、そんな入れ方になってしまっているから、結局、元の組織とは何ら変わらないままなのです。

これから目指すべき本当に多様な組織とは何か、それはステンドグラスのように、形も違う、色も違う、大きさも違う人たちが、調和的に馴染むような組織、それが本当のダイバーシティ・アンド・インクルージョンを体現する組織ではないかと思います。マネージする側も新しい方法が必要ですし、個人にも、人と考え方が違うというのは悪いことではなく、良いことだと認識し直す練習が必要です。今後は、学校の中でもそういった視点を養っていくことで、社会の中で自分の考えを表明したり、居場所を見つけたりするスキルを、学ぶための力と併せて身につけてほしいと思います。

昨年、今年と多くの学校の先生方に対し、オンラインで研修させていただく機会があったのですが、その中で一番多かった質問の一つが、生徒が顔を出してくれない、カメラをオンにしてくれないということでした。実際、オンラインの授業をしますと、ビデオがオフ、音声もオフ、名前も書かない、そもそもアクセスしない、興味すらない、色々なグラデーションがあると思います。

全国400人近い先生向けのオンライン研修でも似たような質問が出たとき、およそ330人の先生方が、カメラをオフにされていたんですね。実際、先生方にもいろんな都合があるのだと思います。「家に帰り、既に着替えてしまったり、部屋が散らかっていて家族から映さないでと言われていたりしているかもしれない。このように、様々な理由でカメラをオンにできないのかもしれませんが、それはきっと生徒も同じなのではないでしょう

か。

いつどんな時も、全ての生徒がモチベーション高く先生を見つめ、必死で勉強しているかということ、そうではないでしょう。興味を失っている生徒もいるかもしれないし、今だけ話の展開から逸れてしまい、興味を持たず他所を向いているだけかもしれません。実は、そのグラデーションがオンラインにより可視化されただけであって、もともと学校の教室の中でも、生徒たちはそんなふうな態度の差異を隠して参加していたのかもしれません。全員が参加し一緒に考えたいと思える授業が本当の意味でできていたのかどうか、それが重要であって、しっかり授業を見つめ直す必要があります。実際の生徒の声を拾うのはとても難しいですが、逆の発想で、全員顔を見せないような形で議論してみるなんてことも、オンラインだからこそできるのではないかと思います。

あと昨年、静岡の中高一貫校と一緒にオンラインで文化祭をやろうと企画したのですが、緊急事態宣言下で学校まで足を運ばず、私や大学の学生たちは、生徒の皆さんとオンラインでの繋がりだけで、結局誰とも対面ではお会いしてこなかったまま文化祭を作り上げることになりました。紹介しているZoom肝試しは、メディアにも取り挙げていただき、彼らは自分たちの力で見事、大規模なオンラインイベントを成功させてくれました。今の子どもたちは、オンラインの力を生かし、自分たちなりに楽しめる文化祭を作ってしまうのです。そして、そういった子どもたちの力や可能性を、大人が知っている手のひらの範囲だけに留めてしまうのは、非常に勿体ないと思います。子どもたちには、どんどん挑戦させてあげる機会を与えてやってほしいと思います。

今日お話しさせていただいたことは、教員や地域の大人のあるべき姿ということからすると、Society 5.0も、SDGsも、まずは大人自身が背中を見せるべくやってみることが必要だし、そのうえで本当に大事だと思えば、先生も必ず生徒に向き合っていただけのもと思います。

そして、これからの学校に望まれる役割、あるべき姿ということに関しましても、やはり色々な学校を見てきた中で、草潤中学校のチャレンジはとても先駆的なことだと思っております。それが日本の真ん中、この岐阜市からスタートしたというのは大きなチャンスだと思っておりますので、ぜひまずは岐阜市内、次にその外へと水平展開していただくとともに、この学校で経験された先生方のノウハウや実践を、他の学校にも波及させていってほしいと思います。2、3年後、これがどれだけ広がっていくか、すごく楽しみです。

先生方の異動について、私は、例えば2人1組で異動するといったことが結構重要な

と思っています。一人だけだと孤立してしまったり、共有できなくなったりすることがある。でも、同じ考え方や見方をした人、共感できる人が2人1組で異動しチームとなれば、この草潤中学校での経験も展開しやすくなるのではないかと思います。

最後、教員研修においても、草潤中学校での経験やノウハウを積極的に伝授し、コンセプトも含めて取組みの輪を広げるとともに、5年先行く岐阜市の教育として、リードして進めていただけたらと思います。長くなりましてすみません、ありがとうございました。

○佐藤事務局長

塩瀬様、ありがとうございました。塩瀬様にはこの後も引き続き、最後までご参加いただきますので、宜しくお願いいたします。

それでは、ここで一旦休憩とさせていただきます。14時45分から再開させていただきますので、宜しくお願いいたします。

(休 憩)

○佐藤事務局長

会議を再開させていただきます。

改めまして、本日、委員の皆様にご協議いただきたいことといたしまして、本市の学校が見据える子どもが主体の学び、本市の学校がこれから目指していくべき9年間に関しての学びについて、ご意見をいただきたく存じます。

それでは、委員の皆様から、順にご意見を伺ってまいりたいと思います。では、まず川島委員、いかがでしょうか。

○川島委員

教育委員の川島です。まずは塩瀬先生、本当にありがとうございました。ご無沙汰しております。私は草潤中学校の前身の徹明小学校区に住んでおり、地元の一員でもあります。先生からお話があったとおり、草潤中学校が非常に皆さんに愛される学校としてスタートしたことは、地元としても本当に嬉しく思っております。今後も引き続き、これからの学校の歩みを見守るとともに、アドバイスもいただければと思っております。

まず、草潤中学校の不登校特例校としての構想の段から、様々な検討や洛風中学校の訪

問等を行い、教育委員会として開校に尽力してきた、その経緯を見てきた立場から発言をさせていただきます。

岐阜市に限らず、不登校の生徒には、様々な原因や理由、背景というものがあります。では、この不登校の課題に私たちはどう取り組むかという中で、子どもたちの多様な選択肢を用意する、そう確固とした思いがありました。

当時、既にエールぎふがあり、20歳までの子どもから若者をトータルでサポートしていくという体制があったわけですが、その中でも、不登校の生徒一人ひとりの状態、背景というものに寄り添うためには、場合によっては医療、福祉も含め、教育という選択肢の中で不登校の問題に取り組む、そのために不登校特例校が必要なのだ、そういった議論を重ねながら、草潤中学校の開校に繋がっていったという経緯があります。

ですから、私は、草潤中学校の取組みの原点として、様々な理由で不登校になった生徒に学びの機会をしっかりと保証する、これがスタートとしてあるのだということを、やはり確認しておく必要があると思っています。

先生のお話を聞いて、私も決意を新たに、今後絶対に進めていかなければいけないと感じたことは、草潤中学校で今展開されている学びというものが、これからの我々岐阜市の教育、あるいは日本が目指す教育の方向性を指し示していて、そこに向かっていかなければならないということです。個別最適化された学び、子ども一人ひとりに寄り添った学びを学校、教員が提供する。今、これを実現しようとしている草潤中学校のシステム、ノウハウが今後どんどん蓄積されていき、公立学校にフィードバック、水平展開されていく。こういったことに、これから私たちは取り組んでいかなければいけないと思いながら、お話を伺っておりました。

では、本日の協議事項としていただいた、学びの主体を子どもものにしていくという点について、私の考えをお話しさせていただきたいと思います。

私自身、少し疑問に思うところがありまして、本日の資料中、学びの主体についての説明として、学ぶ中身を子どもが選択し、子どもが考えて行動する、という一文がありますが、一方で、児童生徒が身につけるべき力や学ぶべきことを明確化し、それをしっかりと体得させる、これが義務教育の役割であるとも書かれています。

身につけるべき力、学ぶべきことをはっきり明確化し、それを教えることが義務教育であるとしながらも、一方で、子どもに学びを選択させるというのは、相矛盾するのように感じる気もします。しかし、学校教員の高度なノウハウで、これをしっかりと両立させてい

くということが必要なのだろうと解釈しています。

その中で、主体的な学びというのはどういうものなのか、これは言葉として合っているかどうか定かではないですが、これまでの義務教育というものは、集団的な効率を上げて学ばせる、そういった姿だったように思います。そしてこれが、本日もキーワードとして幾度となく出ていましたが、生徒一人ひとりの個別最適な教育環境をどう創出していくかという形に、構造転換されてくるのだろうという印象を持っています。

この背景にあるのはやはり、少子化という問題と学校教育や教員のあるべき姿を大きく変えるとされるDX・デジタルの存在、この二つです。そして、これらの背景を踏まえ、集団効率から個別最適な教育への転換というものをどう図っていくかというのが、今後の大きな命題であると思っています。

事務局資料の三角形の頂点には、学びの主体を真に子どもものものとありますが、それを実現していくための一つのツールとして、個別最適な学びが位置づけられています。私は、やはり一人ひとりの個別最適な学びをどう提供していくかということが、最終的には学びの主体を子どもに返していくということに繋がっていくのではないかと思います。

実は今、企業においても同様のことが行われており、集団管理から個別の管理、例えば、労働関係、労使関係なども、集団での調整から個別での調整へと、どんどんシフトしています。これも相まって、私の中ではやはり、より個別最適な教育ということの一つの大きな目標にしていくべきだろうと、そう思っています。

次に、9年間一貫した学びということについて、私自身は大賛成でして、今後さらに整理していきたいと思っていることは、小中一貫校と義務教育学校は何が違うのだろうかということだと思います。法的な背景といったものなどは、今の世の中ネットで調べれば分かりますが、やはり、小中一貫校を目指すのか、それとも義務教育校を目指すのか、それぞれをどう整理して、教育委員会としてどう考えていけばよいかということについては、まだ自分自身の整理ができていません。私自身がもう少し勉強しながら、その方向性を見定めていきたいと感じています。

それと、教育委員会はこれまで、幼児教育の充実について力を入れて取り組んできています。その中で、小・中の9年間一貫というタームに“幼”を加えていくことも、今後考えていく必要があるのではないかと思います。

最後に、私の子どもは小規模校から中学校、高校へと進学していましたが、その中でやはり中1ギャップと言われるようなことが、実際にありました。仮に今後、小中一貫校

や義務教育学校などの施策が進んだとして、それにより中1ギャップは回避できるかもしれませんが、しかし、高校への進学、あるいは社会に出るとき、またギャップに直面するということが当然あり得ると思うのです。

だから、私は草潤中学校の話しかり、小中一貫校あるいは義務教育学校しかり、やはり何かシステムを作ったらそこがゴールではなくて、その後の子どもたちをどうフォローしていくかが大切だと思います。先ほどの藍川北学園の件もそうですが、卒業していった子どもたちが、その後どのように成長していったのか、あるいはどんな困難に直面したかという情報やデータを長い時間をかけて収集し、そこから見えるメリット、デメリットについてもしっかりと分析し、いかなるフォローをしていくかということが必要だと思います。

教育委員会では、数年前からエビデンスド・ベースド、しっかりと情報を収集・分析し、それを次に生かすという理念を実践しており、それが今も根底には流れています。草潤中学校や小中一貫教育についてもその理念のもと、情報の収集と分析、そしてそれに裏打ちされた施策の実施というサイクルになってほしいと思っています。

本日、塩瀬先生のお話を伺って、私自身ももっと勉強しなくてはと、改めて思いました。先生のお話で一番心に刺さったことは、大人がやってみてから子どもに言うべきではないかというメッセージで、私自身ももっと勉強し、子どもたちの前で恥ずかしくない、そんな姿を目指していきたいと思っております。以上です。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、足立委員、いかがでしょうか。

○足立委員

塩瀬先生、本日はどうもありがとうございました。草潤中学校の開校から現在まで、サポートを続けていただいております、また私は今回、しっかりとお話を伺ったのが初めてでしたので、本当に感激いたしました。ありがとうございました。

本日の協議の内容について、子どもが主体の学びを岐阜市がこれからどうやっていくかということでございますが、前回の総合教育会議で、先生によるインプットと子どもによるアウトプット、今はこれが7：3だけれども、これを3：7にし、子どものアウトプットの時間を確保する学びにしていくことが大事である、そして先生は、ティーチャーではなくてコーチ、学びを支える人へと変わる必要があるということが議論され、私もまさに

そのとおりだと思った次第でございます。

しかし、ではこれをどうやって教育していくかということが、本当の課題だと思います。私たちは、知識を教え込む形の教育を受けてきた世代ですし、私たちより若い方でも、まだそういった教育を受けて育った方は多いと思います。

塩瀬先生の先ほどのお話で、子どもにやってほしいことは、まず大人がやってから言うべきだということでした。確かに、自己研鑽をしない、大人の学び直しが無い日本の大人の姿について、海外との比較でこれほどまでに違うのかと驚いた次第ですが、例えば、私たち医師も、昔は医師免許を取ったら取りっ放し、20歳で取った人が90、100歳になっても免許を維持している、そんな状況でした。現在は、専門医制度での研修や、5年ごとの研修による専門医資格更新の仕組みができていますが、日本人は学び直す、または評価したり、反省したりということが苦手なように思います。

最近、藤井聡太3冠がメディアを賑わせておりますが、将棋で感心いたしますのは、感想戦というものがあることです。戦った後に、勝者も敗者も一緒になって棋譜を振り返る。彼らは全ての手を覚えているわけですが、この場面ではこのように考えました、そこでこうやっておけばよかったですね、ああ、これがまずかったですね、ここは良かったですね、こうやって当事者がお互いに振り返るわけです。まさにこういった振り返り、評価や反省といったことが、社会ではあまりなされていないのではと思います。

それから、勉強し直すにしても、何を学ぶかしっかりと考えを持ち、それを選び取っていくということが、まず大人自身できていないように思います。教員もその一人でありまして、教員が自身に必要なだと考えることについて、常に自己研鑽や学び直しをし、実践する。そして、その実践の振り返り、評価・反省もし、さらにはアウトプットを増やすようにコーチングしていく姿が変わっていく。まずは、大人自身の変革が大事だということを感じた次第でございます。

それから、9年間の一貫した学びということでございますが、元々は少子化ということで、先ほどの藍川北学園のように子どもが減ってきている中、1小1中という現状に対して、今の小中一貫教育の姿があるのは理解できます。中学校の先生が、小学校の高学年にその科目の授業を教えてくださいのような、良い循環が生まれていることも望ましいことです。しかし、この9年間一貫した学びというものの意味をさらに一歩踏み込んで、もう少し深く考えなければと思っております。

例えば、一貫カリキュラムの中で飛び級制度ではないですが、優秀な子はどんどん進ん

でいく、そうでない子は確認しながら進んでいくような、個人の習熟度というものをどうやって尊重していくのかという視点を、もっと掘り下げるべきだと思います。9年間で6年と3年ではなくて9年間一括りに考えますと、これはより難しい問題になると思います。

また、これは大学受験の仕組みの問題そのものだと思いますが、現在の学力に偏りがちな考え方、これとどう折り合いをつけていくのかというようなことも見据えていかなければと思います。まだ私自身も整理できていませんし、今後も勉強させていただきたいと思っております。ありがとうございました。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、武藤委員、いかがでしょうか。

○武藤委員

武藤です。塩瀬先生、本日は大変貴重なお話、ありがとうございました。また日頃より、草潤中学校の運営等に関してご助言をいただいていることを心から感謝申し上げます。ありがとうございます。

草潤中学校での実践を水平展開するというお話は、教育委員会の中でも多くの委員がその必要性を指摘しているところでして、具体的にどういうところをどのように水平展開するかという、塩瀬先生の貴重なアイデアをお伺いできて、非常に有意義なお話をいただけたと思っております。

まず、子どもが主体の学びについてお話しさせていただきますが、草潤中学校では、子どもが学ぶ時間、場所、内容などを自身で選択して取り組んでいるという実情を伺い、これは、子どもにとっては大変勇気が要ることですが、実際にそれが上手くいけば、大きな自信にも繋がると思います。教えてもらって分かるのとは異なり、自分自身で掴み取るということは、直接的ではないにしろ、自己肯定感の醸成といった観点などについても、非常に有用なのではないかと思いました。

しかし、子どもが自分の好きなことだけをやり、嫌いなこと、苦手なことはやらない、本当は必要なことなのにそれができないということがあってはやはり困るわけで、先ほどからも指摘があるように、だからこそ先生の役割が、大変重要となってきます。事務局の資料でも、教えるから支えるへ、そう変わることの必要性が示されていますが、何を学ぶべきなのかという選択に際して、やはり先生がしっかりサポートできる、教員の役割がそ

う変わっていくのだということを教員自身が自覚し、子どもと一緒に学びの在り方というものを考えていく姿勢を持つことが大事だと思いました。それを続けることにより、子ども自身が少しずつ自分で色々なものを選択し、学び取っていくことができるよう変わっていくのではないかと思います。教える先生側の意識改革ということが、これから大変重要なポイントになってくると思い、聞いておりました。

もう一つ、9年間を見通す一貫した学びについてのお話ですが、藍川北学園の非常に良い実践をご報告いただき、とても順調に進めていただいているということがよく分かりました。校長先生のお話の中で、よく知っているからこそ、この子はこういう子だというレッテルを貼られ、なかなか剥がせないという話が出てきました。

私は、これは結構重要な指摘だと思っています。小・中が繋がり、9年間を通じた充実した学びが得られると同時に、もしそこで何らかの理由で躓くようなことがあった場合、そこから抜け出すチャンスが長い期間与えられないという可能性がある、これは子どもにとっては結構、深刻なことだと思います。

例えば、小学校で不登校になっているような子どもで、中学校に進学するタイミングでもう一回やり直そうであったり、あるいは中学校から私立に行き新たなトライをしようと思う子は多いでしょう。先ほど川島委員から、多様な選択肢が必要だというお話がありましたが、私は、小中一貫校、義務教育学校という選択肢は、多様な選択肢の一つと考えるべきだろうと思います。小中一貫校や義務教育学校の良さは当然認めつつ、でも、もしそこでうまくいかない子どもがいた場合、新たな別の選択肢、多様な選択肢を用意することが必要ではないでしょうか。

当面は小中一貫のを中心と考えていくこととなると思いますが、本当にそれだけで良いのだろうか。それぞれの個別最適化の学びが進めば、その学びの進み具合もそれぞれ違ってくるので、9年間のうちのどこで区切るのがいいのか、また区切らないほうがいいのか、これもかなり個別具体的に違ってくる可能性が高いです。そうすると、ますます多様な選択肢を考え続けていく必要があるのではないかと思います。私は、子どもたちに多様な選択肢を用意することを大切に考えながら、これからの教育を考えていきたいと思っています。以上です。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、伊藤委員、いかがでしょうか。

○伊藤委員

教育委員の伊藤と申します。本日は貴重なお話をお聞かせいただきまして、ありがとうございます。塩瀬先生がおっしゃった言葉を私なりに言い換えると、まず私たち大人が、日頃から現実社会に対して問題意識を持ち、“なぜ”を探求するとともに、もっと学びたいという気持ちを持てる、そんな人にならなければならない、そういうことだと思いました。まさに、魅力的な大人の下でこそ、魅力的な子どもたちが育っていくということを、改めて感じた次第です。

今朝、学校の授業の中でアウトプットはどのぐらいやっているのか、子どもと話をしてみたのですが、すると、インプットではなく、アウトプットがメインの授業になることが望ましいというようなことを、子どもが自ら話し出したのです。驚いて、いつそんなことを知ったのかと聞いたら、結構前からそんなこと知っている、それはyoutubeで見て知った、そう言っていました。

私は、youtubeについては疎いですが、早稲田大学を卒業した有名なユーチューバーがおり、その人が科学的な論点で物事を話していくチャンネルがあるようです。子どもはそれをよく見ているみたいで、そこで知ったようです。そしてそれを知ってからは、自分もなるべくアウトプットを増やしていこうと思い、家庭学習では応用問題に取り組んでいるのだそうです。

実際、子どもの勉強は子どもに任せているので、しっかりは知らなかったのですが、じゃあ学校ではどうなのと聞いたとき、多分、1、2割ぐらいしかされていないと言っていました。さらにそれはどうしてと聞くと、先生たちは、公教育だから学習の理解度がそれぞれ異なる子どもたちを皆一度に教えなければならず、しかも学習要領がどんどん増えていて、教え続けなければ授業が終わっていかない。当然、子どもによっては丁寧に踏み込んで教えることが必要な場面もあり、アウトプットのことまで考えてやっている暇がないんじゃないかな、と指摘していました。我々が思っている以上に、子どもたちは本当によく大人の様子を観察していますし、色々なことを理解していると、改めて感じました。

私たち教育委員会や学校教員の先生方が学校のことをこうして語り合うことは、もちろん大切ですが、学びの主役である子どもたちの意見をどこか蔑ろにしてしまっていないか、そう思うのです。ですので、どうしてアウトプットを7割にする必要があるのか、私たち大人だけがそれを理解して、いきなり変えていくということではなくて、やはり子ど

もたちにも理解してもらい、そのうえで、子どもたち自身もそういった学び方ができるよう、心得ていってもらうことが必要だと感じています。

その中で、先生たちがアウトプットの授業を普段からできるようにするには、どうしたらいいのか。これはアウトプットの認識が、人によって多少異なることはあるものの、少し理解を促し、やり方を捻っただけできっと変えていけると思うのです。

例えば、生徒同士で教えたり、これまでなら先生が調べて教えていたようなことを子どもたちにタブレットで調べさせたり、自分の言葉でノートにまとめさせたりすることもそうだと思います。今の学び方をどのように変えていくか、時には子どもにも一緒に考えさせながら、子ども主体の学びへと変化させていかなければいけないと思っています。

一つ懸念していることとして、アウトプットが大切だと声高に言っている中、実際のところ、子どもたちがアウトプットすることをまだ楽しいと感じられていないのではないかと、と思っています。アウトプットが楽しいと、いかに気づかせてあげられるか。それはいわゆる学ぶことが楽しいと思える環境をつくること、さらに言えば知的な好奇心、自分が学びたいと思う気持ちをいかにくすぐることができるかです。そしてこれが、私たち大人の大切な役割だと感じています。

今の子どもたち、例えば中学生にとっての学習の目的は、その大半が高校受験のためとなってしまうのが現状だと思います。よい高校に入り、よい大学に入り、大企業に勤めること、それこそが幸せを担保できることだと、私たち大人が勝手に思っているのです。しかし、これからはもうそんな時代ではなく、自分たちで思考力や判断力、表現力を伸ばし、生涯に亘り自ら学び続ける大人にならなければ、自分たちで幸せな未来をつくり出すことはできない、そう教えていかなければならないと思っています。

子どもが言う好きな先生というのは、教科書に無いことを教えてくれる先生、あるいは教科書の知識と現実社会の課題を結びつけてくれる先生であり、そんな先生の授業はとても楽しいと話しています。そういった経験が、やはり子どもなりにも記憶に刻まれ、学んでいこうという思いに結実していくのではないのでしょうか。現実社会の事象や課題を見せることで、一人ひとりに様々な発想が生まれ、やがてそれが自分の方向性を持つことにも繋がっていきます。学校での学びは、一人ではできない、家ではできない学びとなっていくと思いますので、その姿を深く掘り下げていきたいと思っています。

次に、9年間の一貫した学びについて、これはちょっとお尋ねしたいのですが、校務の効率化や質の向上とありますが、例えば、養護教員の先生は2名になるのでしょうか。ま

た事務の方も2名いるのでしょうか。小中一貫校となることが教職員の働き方改革となり、その分、子どもたちに携われる時間になるのかということもお聞きしたいですし、目指す姿として、独自の学校カリキュラムを作りたいとの構想もありましたが、その辺りもしお時間あれば、後ほど伺いたいと思います。

あとは、武藤委員も少しお話しされたように、9年間、全く同じ子どもたち同士で過ごすということで、クローズされた世界になり過ぎないかという懸念もあります。

私の子どもが通う中学校は、2つの小学校が集まっていますが、互いに全く違う文化の小学校だったらしく、それが新鮮で、すごく勉強になったと話しておりました。

9年間全く一緒の少ない人数の中で学んでいくということで、なかなか難しいかもしれませんが、クローズされ過ぎた世界にならないよう、時には他校との交流を行うなど、少しでも多くの違う世界を見聞きできる機会があるといいのではと思いました。以上です。ありがとうございます。

○藍川小学校・藍川北中学校 中谷校長

校務の効率化ということに関しましては、今はまだ小中一貫校として取り組みつつも、小学校と中学校がそれぞれ存在しておりますので、養護教諭、事務員も各校に1名ずつおります。今後、学校が本当に一つになれば、定数に沿って配置されていくことになると思いますが、今は双方が本当に融通し合い、助け合いながら取り組めており、またそのタスクが小と中で共有されて、一緒に処理するなどの校務の効率化ということも図られつつあります。また、中学校単独だと1教科1人しかいない教科が多いですが、一貫校だからこそ、小学校の先生もそこに加わってくださることで、好循環が生まれていると思います。

クローズされた世界になることへの懸念に関しましては、現在も積極的に異学年交流を進めておりますとともに、今後も様々な交流機会を持ち、しっかり対応していきたいと思っております。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、横山委員、いかかでしょうか。

○横山委員

塩瀬先生、どうもありがとうございました。草潤中学校の話をお聞きし、微力ながら開

校に関与した人間として非常に嬉しく思っておりますし、あの取組みをぜひ、岐阜から発信していくということが大事であろうと思います。文科省の方では、令和の日本型教育ということをおっしゃっていただけますけれども、私は、令和の岐阜型教育というようなことを、堂々と述べて発信していったらよいのではないかと考えております。

塩瀬先生がお話しされた、子どもたちが将来何になりたいかということについて、もうかなり前になりますが、私の子どもの小学校で少年野球団に関わっていたとき、卒団式で同じ質問をしたことがあります。子どもたちは皆、勢いよく手を挙げ、その中で指名したキャプテンの子が、誰よりも長生きすることが夢ですと言ったことを覚えています。そのときはコーチ同士で苦笑いし、えらい現実的な夢やなあと言ったことを思い出しました。

まず、子どもが主体となる学びについてですが、これも15年ほど前、私は関西に勤務していたことがあります。関西と言えば、たこ焼きが有名ですね。私たち家族も皆好きだったので、まだ小さかった子どもと家族4人で、休日にたこ焼きを作りました。作っているとき、私はせっかちな部分があるものですから、ジュークジュークとしたところですぐ返そうとして、もうちょっと待った方がいいんじゃない、と子どもに諭されたわけです。そして、言われたとおりに少し時間を置いてから返すと、きれいにたこ焼きができました。

ふと、そんなことを思い出したのですが、それは、このことがどこか子どもの教育と同じだなと感じたためです。色々なことがあるけれども、まず基礎・基本というものをしっかり教える。そこはどんな時代になろうとも、まず押さえなければいけない、不変的なことだと思っています。

それから、これも少年野球団で体験したのですが、コーチにも色々な人がいて、手取り足取り、徹底的に教えるコーチもいれば、ひとこと言うだけのコーチもいるわけです。徹底的に教えるコーチの子どもは、やはりバッターボックスに立ち、ヒットを打つのが早かった。一方、もう一人のコーチは、バッターボックスに入ったら、ピッチャーが投げるところだけよく見ていなさい、そう言うだけなのです。

だから、子どもはバッターボックスでの間合いであったり、バットの振り方であったり、色々なことを自分で考え試行錯誤した末、手取り足取り教えてもらった子どもより当然時間はかかりましたが、ヒットを打てるようになりました。そのことを考えたとき、子どもにとって成功体験はもちろん大事ですが、まさにそこに至るための過程、成長体験というものを実感できることも、非常に重要なのではないかと考えた次第です。

今は、学校での学びが社会にどう繋がり、どう生きるのか、まさに社会との接点をしっ

かり見定めたくえで、学びを創っていかなければなりません、その学ぶ過程には、やはり子どもたちが色々と試行錯誤する、そういった場、時間をしっかりと持つことが必要ではないかと思っています。だから、塩瀬先生も仰っていましたが、子どもの学びについて、要は大人の教え方がその鍵であって、ではその望ましい教え方をどう大人自身が学ぶのか、それが大事ではないだろうかと思っています。

学びを社会に生かすということは、要は、自分はこれからどう生きていくのかということに繋がると思いますし、それは岐阜市が重要課題に挙げている生命の尊厳、命というものをどう大切にしていくかということ、そういった考察にも繋がると思います。そういう意味で、私はぜひ多くの人と交わったり、話す機会というものをどんどん設けてほしいと思っています。その人はどんな人で、どんな生き方をしてきたか、子どもたちに学んでもらい、そこから自分に返ってまた色々と考える、そんな取組みを特に進めていったらよいのではないかと思います。

それから、2番目の小中一貫教育について、これは今の時代の流れ、少子化や社会の変化を考えれば、もうこの方向に行かざるを得ないことであり、そのように進むことになると思うのですが、私の中で求めたいことは、やはり単に小と中をくっつけるだけではなくて、異学年交流を積極的に推進するということです。

小学校1年生と中学校3年、この両者は年齢が8つも違うわけで、そこをうまく織り交ぜてやれば有機的に作用し、お互いに何か学ぶ、得るものがきっと見いだせると思います。この点、先ほどの藍川北学園が既にそういったことを実践してくださっており、嬉しく思った次第です。

さらに、小中一貫校での取組みに関しては、コミュニティ・スクールをバーチャルな組織や仕組みとするのではなく、もう少し現実的なものとして、一貫校での取組みと連動させるようなことができないかと思っています。コミュニティ・スクールにおいて、学校に主体的に携わっておられる方々にコミュニティ・スクール教員、ティーチャーの称号を与え、実際に見える化し、一貫校とコミュニティ・スクールが繋がっていく、そんな仕掛けが展開できればと、私自身思っております。以上です。どうもありがとうございました。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、水川教育長、いかがでしょうか。

○水川教育長

塩瀬先生、ありがとうございました。草潤中学校のグラウンド・デザインを描く段階からご助言いただいたということを知っておりましたが、本日、先生のお話を聞いて、本当にありがたいなと感じております。草潤中学校が開校して半年ですが、学校なりのアイデンティティ、それがしっかりと見えていることが、やはり草潤中学校に対する賛同の声の礎となっていると強く感じています。

実はつい先日、来年度に向けた学校説明会を行いまして、来年度の入学可能者数は、新1年生が13名、新2年生及び3年生が若干名であるにも関わらず、2回の説明会に合計300名近くの方が参加されました。大変なニーズとともに、やはりこの学校が提案することの価値、可能性を改めて感じた次第です。

私もこれまで幾度となく学校を訪問し、生徒と話す機会も何度もありました。そのうちの一人の生徒は、小中学校で初めて学校が楽しいと思った、そう語ってくれました。これはものすごく責任の重い言葉だなと思っています。また、この生徒に、学校説明会に参加した生徒に向けて話をしてもらったのですが、今日の説明会、学校見学に来たこと自体があなたの挑戦だと思ってください、そう語りかけてくれました。たった半年でこんなに自分らしく、力強く話せるようになるなんて、本当にすごいことだなと思いました。

もう一人、これは別の生徒が話してくれたことですが、先生にとっては何人もの生徒かもしれないけれど、生徒にとって、私にとってはたった一人の先生なんだということ、やっぱり先生にはしっかり考えてほしい。これも、とても胸にささる言葉でした。

そしてもう一人、この生徒は、学校は何をする施設ですかという質問をしました。つまり、何のために学校はあるのかということを知っているのです。実はこの質問、以前、文科省の副大臣が草潤中学校を視察されたとき、副大臣に直接聞いた質問なんですね。学校の存在する意味を考えるということは、すごく大きな命題であると私自身思っていますし、塩瀬先生から今日お話しいただいたことが、まさにそれに繋がっていると感じた次第です。

学制発布から150年間、日本の教育制度において、基本的には前方に黒板があり、先生が話をして子どもが聞くという光景はずっと変わらぬままでした。だからこそ、日本の教育がすごく質の高いものを担保していることも間違いのないと思うのですが、今日お話を聞きながら、やはりそれに乗り切れていない子どもたちがいるのだという現実を直視することと、もう一つ、それで本当にこれからの子どもの未来が創れるのだろうかということ、この2つを私は今、強く思っています。

小学校という船に乗せて次の港へ送っていき、次は中学校という船に乗せて高校に送り出してやるような設計ではなくて、乗っている子どもたちがどこの港に行きたいのか、自分で決めて自分で船を進めるような、そんな教育制度を作ろうと思ったとき、草潤中学校に込められたコンセプトは、大事な点をしっかりと突いたものになっていると、今日のお話を聞いてその思いをさらに強くしました。

楽しいだけが学校ではないけれど、やはり学校は楽しくなければ駄目だ、そう全ての教育に関わる者がインプットしなければならぬと思っています。誰しもが今日が楽しく、明日もまた来たい学び舎が学校である、私はそうあってほしいのです。

そして、学ぶ目的や学ばせ方をやはり変えていくべきだと思います。学ぶ目的については、単純に、子どもは自分の未来を創るために学校にやってくるのであって、賢くなるためにやってくるわけではない。自分は将来どんな大人になるか、大きくなったら何になりたいのか、そんな夢を膨らませるために学校に来るのだという考え方を持ってほしいと、私は思っています。

また、学びの主体を本当に子どもものものにしようと思ったとき、中谷校長が話されたような小中一貫校、あるいはそれを発展させて、子どもが1年生のときに持ってきた自分のパスポートを9年分磨いてやり、その9年間でどう変わっていったのかということまでちゃんと認めて卒業させてあげられるような教育、まさに学びの目的ベースで学校教育を設計できるような学校が必要だと思います。

もう一つ、やはり自ら選択するという経験が、学びの重要な過程となると感じています。選択と行動には責任が伴うものであるという理解のもと、草潤中学校の生徒たちには、自分で選択するからこそその責任をしっかりと受け止める姿勢、度量を強く感じます。そんな強さ、しなやかさを培う教育を実現したい、塩瀬先生のお話を聞きながら、改めてそう自分の思いを強くした次第です。ありがとうございました。以上です。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。それでは、市長、お願いいたします。

○柴橋市長

新しく改定された教育大綱において、自らの選択と行動によって幸せな未来をつくり出せる力を育むということを掲げたわけですが、一つは、いかに学校での学びの中で、自身

で選択し行動する機会をたくさん作るか、これが重要ではないかと思います。前回、前々回と部活動についての議論がありましたけれども、その中でも部活動というのは、数少ない学校の中で自ら選択できるものであるという位置づけがございました。

一方で、実は様々な日常生活の中で、子どもたちは選択と行動をしているはずで、言わば無意識にそれをやっているのだと思います。先日、私は清流中学校区の家庭教育学級に招かれ、子どもたちにメッセージをとということで講演させていただいた折、大綱に基づく選択と行動ということについてお話ししたのですが、その中でも、例えば、朝御飯に何を食べるか、それだって立派な選択と行動なんだよと伝えました。無理やり食べさせられるわけではなく、また親が用意してくれるのかもしれませんが、それを食べるか食べないか、自分で決めているわけです。

だから、無意識に色々なことをやっているんだけど、そこに意思を持ち、主体的に選択し、行動するという過程がすごく大切ではないか、教育大綱の中で目指す子どもの姿として謳っていることは、そういった姿を捉えているのではないか、私自身はそう思っております。

それから、本日の事務局の説明の中でも触れられていましたが、やはり学校というリアルの場所において非常に重要と感じることは、仲間と学ぶという協働の学習だったり、先ほどから出ている異学年交流、異年齢のコミュニケーションや学びというところだったり、ひいてはアクティブ・ラーニングという形で学んでいくということで、本市の教育の中では、既にそれが実践されている部分もあるかと思います。

しかし、そういったことを今一度しっかりと位置づけ、これからも取り組んでいくことが大事ですし、構造転換するだけでなく、今やっていることをよりレベルアップしていくという視点が大事なのではないかと思っております。

塩瀬先生のお話の中でスタンドグラスの例えがありましたが、私は、なるほどそのとおりだと思いました。管理型の教育については、昨年度の総合教育会議の場で、早川前教育長もこれまでの学級経営に対する問題提起をされていたと、記憶しております。タイトルの決められた一つの形に当てはめていく、このやり方の中でやれば、子どもたちが大きく学び成長するという、一つのモデルの形に当てはめてしまうのがまさに管理型の教育です。

しかし、様々な子どもたちがいて、学校形態が変わったり、タブレットが導入されたりという新たな教育環境が構築される中で、多様な学びを行っていくならば、やはりそれは特定の形に囚われるのではなく、それぞれがそれぞれの選択をし、自分の学び方を見つけ

ていく、そしてそれを認めていくような価値観に変えていくことがとても重要だと、私は思います。

草潤中学校は今のあの形で一つの成果を収めているとしたときに、じゃあ他の学校では、考え方としてどうそれを実践していくのか、おそらく、草潤中学校と全く同じやり方を全ての学校の中に一律に落とし込むことは、現実的に難しいでしょう。だとするなら、そのエッセンス、英知となる部分を結集し、目指すところとして掲げながら、それぞれならではの形を模索しつつ、取り組んでいくことが大事ではないかと思います。各学校それぞれのステンドグラスはどういう形なのか、それをぜひ私も探究したいと思います。

最後に、塩瀬先生からご紹介いただいた“わがまま通信簿”について、私はこれも大変面白い取り組みだと思っています。人には承認願望というものがあります。きっと、子どもたち誰もが、自分が一生懸命やったこと、頑張ったことを、担任の先生や身近な大人にしっかり見て承認してほしい、そう思っています。そしてきっと、この認めてあげることというのは、実は、ほんのちょっとした創意工夫で十分にできることだと思います。

例えば、学期が始まるときの目標設定において、今期、私が一生懸命やりたいと思っていることを先生と話す、そんなコミュニケーションを少し行うだけでも、それが叶う、目的を達することができるのではないかと思います。

ですので、私ももっと自分なりに、このわがまま通信簿を研究してみたいと思いますし、現実的にも、今後広く導入できるのではないかという印象を持ちましたので、今後の経過についてもまたぜひ、教えていただければありがたいと思います。どうもありがとうございました。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。ここで、塩瀬様にもぜひ、ご意見をお願いできればと思います。お願いいたします。

○京都大学総合博物館 塩瀬准教授

限られたお時間の中で、すみません。皆様の意見交換を受けまして、少しだけお話しさせていただけたらと思います。

<学ぶ中身を子どもが選ぶ>ということと、<必要な教育をしっかりと受けさせたい>ということが相矛盾するのではないかという心配のご意見に関して、それは『生徒が選べ

ないという前提』に立つと、やはりそういう結論になってしまうのだと思います。

子どもに好きなものを食べろと言うと、ハンバーガーとスパゲッティばかり食べてしま
うんじゃないか、栄養バランスの取れた幕の内弁当をしっかりと食べてほしいと大人が思
ったとき、きっと今までは、その食べる理由というものを説明していなかったのだと思
うのです。それはまさに、学校で教えることは大事なものだという大前提の下で、これまで
学びが行われてきたことと同じです。

だから、本当に必要であるということをもとにしっかりと子どもと共有しながら、その中
でどの順番で身につければいいか、あるいは自分の食べやすい順序というものが個々にあ
ると思いますので、そういうところに選択肢を設けようということです。選ばせるという
ことは、ずっとハンバーガーだけを食べる暮らしをしようという意味ではありません。大
切なことは、子どものことを思って一緒にそのメニューを考え、食べるもの、食べ方、順
序について無理のない選択環境を準備することで、必ず矛盾なく共存できるとしていま
す。

そのときに大事なのが個別最適ということなのですが、この個別最適という言葉、大人
が使うときは、オーダーメイドというニュアンスの良い意味で使っていますが、実は子ど
もたちの中では、この個別という言葉は、ネガティブな言葉として使われることがあるこ
とに留意せねばなりません。習熟度別クラスで、できる子、普通の子、できない子に分か
れ、できない子はできない子用の問題が渡される。場合によっては、個別という言葉によ
り、その格差が反って開くのではないかと考えています。

だから、個別という言葉は、大人が使うときと子どもが使うときとで、プラスマイナス
がずれているところがある、そう認識すべきです。本来は、一人ひとりに合った、一人ひ
とりの成長を促すというような意味で使いたいのですが、現状、先ほどの習熟度別がネガ
ティブに受け取られているような側面があるわけです。

ハイキングコースで30分コース、50分コース、110分コースがあったとき、どれ
を登っても、最後は頂上に行けるはずですが、今の生徒たちの個別の理解は、下の
コースへ行くと下からの景色しか見られない、展望台が頂上とは別の低いところに設置さ
れている、そう思い込まされているところがありますので、皆がちゃんと頂上まで登って
いくことができる、その辿る道筋が違うだけなのだということを共有しないと、個別最適
という言葉がうまく伝わりません。

そのとき、学校の先生が今までと同じ授業のやり方で個別最適を実現しようとする、

破綻します。つまり、今までと同じ方法を5人に適用しようと思うと、5倍の時間がかかることになってしまい、決してうまくいかない。だからこそ、そこでDXという考え方が必要であって、デジタル化することにより、今までかけていた時間数を圧縮し、その空いた時間を個別最適に使うといった姿に変化していかなければなりません。教育を効率化する、その視点がとても大事だと思っています。

ここでの<効率化>は、決して手を抜くということではなくて、一人ひとりの子どもたちとしっかり向き合える、そのために必要な効率化を目指すことを意味しており、その点で、本当の個別最適を実現するためのDXが、積極的に導入されることが望まれます。

もう一つ、小中一貫校の話で、返って高1でのギャップが生まれてしまうのではという意見についてですが、確かに繋ぐということにより、メリットとデメリットの両方が生まれます。つまり、中1ギャップを解消することと同時に、高1ギャップは大きくなります。

例えば、日本の幼稚園、保育園は、子どもたちが転んだり躓くことがないように、段差、ギャップというものを無くします。一方、デンマークやドイツの幼稚園、保育園は、全く逆で、あえて段差やギャップをそのまま残しておきます。凸凹があることにより、子どもたちがより凸凹の上を歩けるように、また、卒業後に凸凹で躓かないように育てる。そう考えるのです。

だから、9年間温かく見守られることは、その9年間のためだけではなく、卒業した後に必要となる学びや体験をも得る9年間である、そう位置づけるべきだと思うのです。ギャップそのものが悪いと断じるのではなく、ギャップを乗り越えられるよう導いていくことが、大切なのです。

これまでは、そのギャップに悩む子どもたちを十分導くことができていなかった、それが現実だと思います。特に、小学校から中学校への進学というのは、教科担任制が変わる、他地域からの人間が急に増える、科目が難化する、これら3つの変化が同時に訪れることにより、戸惑いが生じます。小中一貫校にすることにより、そこに少しグラデーションをつけるというのは確かに一つ的手段だと思いますが、本当は、ギャップの乗り越え方そのものが子どもたちに必要なことであって、9年間見守られる中で、むしろどうやって他のギャップを生み出すか、そしてそれを乗り越える力をどう身に付けてもらえるかに、思いを巡らすことが大事なのだと思います。

これは、リハビリテーションの考え方に近いです。例えば、病院にとっては段差を無くすことで転倒を防止し、無事に退院してもらえれば、本当は都合が良いです。しかし、リ

ハビリの考え方からすると、段差をしっかり乗り越える練習をしていただかないと、後々、家に帰って生活することができなくなってしまうわけです。子どもたちの9年間の学びの中で、しっかりとギャップを乗り越えられる、子どもたちの力を一緒に育てていくことが大事だと思います。

学びの形式（フォーマット）を色々な学校間で共有しながら実践を行っている参考事例として、大分県の安心院高等学校が中心になって取り組んでいる小中高一貫教育をご紹介します。ここでは、小中高一貫教育のカリキュラムとして、地球未来科という共通科目を小学校、中学校、高校の全てでやっています。複数の色々な学校に跨っていても、一緒に同じ地域について考えるという共通項があるわけです。進学により学校が変わっても、大きな拠り所として一つの学びを共有する、これも有効な一つの手法ではないかと思います。

小中高一貫校として、学校を中心に考えるだけでなく、地域の中に9年間の学校があり、そこで学び育ったことが、まちの中、暮らしの中はどう生きるかということまで行き渡る、そんな学びができる学校になってほしいと思っています。すみません、お時間いただき、ありがとうございました。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。皆様からいただいたご意見、具体的な施策、方向性を踏まえ、最後に市長より、総括的に改めて一言いただきたいと思います。

○柴橋市長

改めまして、本日はどうもありがとうございました。子どもたちの学びにおいて、その主体は子どもであるということを我々は共有しているわけですがけれども、その主体となる子どもたちが実際に、どう選択、行動し学んでいくのかということについては、当然、様々なサポートが必要で、まず基礎となる部分をしっかりと学ぶ機会を担保する必要があるし、選択をしていくにあたっては、様々な考え方や順序について理解を得たうえで、子どもたちが主体的に選択できるようにしていくことが重要であると、皆様からお話いただきました。

今後、9年間一貫した学びを形作っていくにあたって、まずはベースをしっかりと作ること、そして色々な選択肢が広がるような体験的な学びを提供し続けていくことで、子どもたちの学びを保証していく必要性を改めて感じた次第です。

先ほどは、中谷校長先生の藍川北学園のお話に触れず申し訳なかったのですが、本日はありがとうございました。ある意味、本市の教育の中でトップランナーとしてのチャレンジをしていただき、またその成果も、本日改めて共有していただきました。

あえてギャップを作る。でもそれをしっかり後押しする体制も作っておく。そうする中で、子どもたちの物事を乗り越えていく力強さを育てていく。塩瀬先生がおっしゃったことは、今、不登校の課題に取り組んでいる本市として、とても重要な示唆であったように思います。

ぜひ、学校、家庭、地域、全てが子どもの教育の当事者であると謳う岐阜市ですので、皆でいい意味での子どもたちのギャップを、そしてサポートできる体制をこれからも作っていきたいと思います。今後とも皆様のご協力を宜しくお願いいたします。本日は、誠にありがとうございました。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。本日、皆様からいただいたご意見は、事務局で改めて整理させていただき、最終回の年間総括にてまたお伝えさせていただければと思います。

なお、本日の会議録につきましては、後日、岐阜市ホームページの公開を予定しておりますので、宜しくお願いいたします。

塩瀬様におかれましては、本日は大変ご多忙の中、ご出席を賜り、誠にありがとうございました。

次回の第4回総合教育会議は、11月16日火曜日、13時30分より、開催を予定しております。詳細につきましては、改めてご連絡申し上げます。

それでは、これをもちまして令和3年度第3回岐阜市総合教育会議を閉会いたします。本日は誠にありがとうございました。

(15時30分閉会)